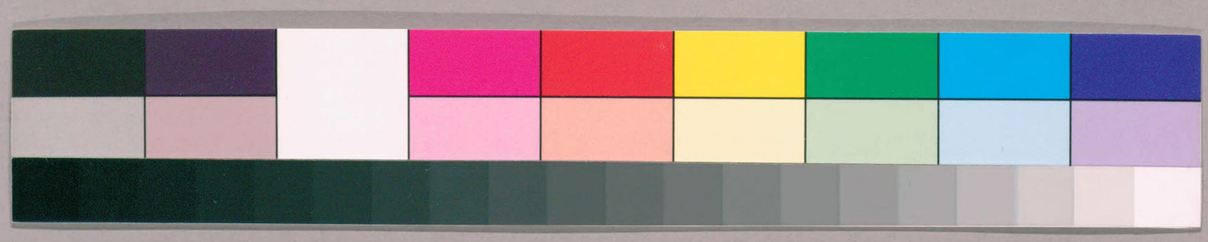

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

国立国会図書館　　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』 請求記号 WB12-64

ガラス使用

WB12
64

国会図書館蔵書

太子堂のほとり

自叙傳の試み（十五）

和辻哲郎

山陽線の加古川駅の南方十四五町のところに鶴林寺といふ寺がある。その寺のいかにも愛らしい数をした聖観音像がこの頃は東京の博物館にならべてあるので知つてゐる人も多いかと思ふが、もとは推古佛のうちに数へられこの頃は白鳳佛といはれてゐる

（和辻用箋）

1092347

中央公論　五月号　五

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

この銅像が示してゐるやうに、これは申綿の古い寺である。普通には六角堂と呼ばれてゐる。聖徳太子の創建といふ伝説をこの名で現はしてゐるのである。現在本堂のそばにある太子堂は、推古とか白鳳とかといふ古いものではないが、しかしそれでも様式の上から平安時代末期の建立と考へられてゐる。三間四面の小さなお堂であつて、三間三面の宝形造の前面に一間通りを庇をつけて屋根をふき下してゐる形がいかにも優美である。

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

それは比べようとそのそばの本堂は、七間古面の大きなお堂で、時代も大分さがり、室町時代初期の建築だろうということになってゐる。

もとの本堂がどんなものであったかは一向解らないが、養老年間に七堂伽藍を建造した時には、境内二十四丁で三百の坊があったということであるから、もとは相当に大きい寺であったと思はれる。

現在でも加古川から高砂へ通ずる軽便鉄道はこの寺の東側を通り、南側の門外に停

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

中央公論　五月号　五円

車場を設けてある。この鐵道が敷設されたのは、わたくしの子供の頃よりは大分後のことである。それまでの唯一の交通路は大川から尾上の松を経て高砂へ行く街道で、それがこの寺の北門の前から、寺域の西側を迂回して、南門前へ出てゐる。寺の南東側にある村が安田、北西側にある村が北在家であるが、この北といふのは寺からの方向づけを意味してゐるかも知れない。その北在家の西のはづれ、寺の北門を出て二町ほど西へ行つたところ

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

又に、植田といふ小字があつて、水田の中の小高い地所に、人家が四五軒立つてゐた。その一軒かわたくしの親戚の井上の家なのであつた。

明治の前半に小学教育が追々整つて来て、高等小学校を建てなくてはならなくなつた時、加古郡では、この鶴林寺の境内をかりて、二棟ほどの校舎を建てたのであつた。こゝへ加古川、高砂、別府、その他加古郡の所々方々から、学齢小学を卒へた子供たちが通つて来た。

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

中央公論　五月号　五四

のである。遠いところは一里半から二里位も
歩かなくてはならなかったであろう。
この事情はわたくしの村でも同じで、自分
の郡の高等小学校へ通うとなるとやはり一
里位は歩かなくてはならなかったのであるが、
井上の家に寄宿すれば僅か二三町のところ
の高等小学校へ通える。さういふわけで、既
にわたくしより七年前にわたくしの兄が
この高等小学校に入学し、二年前にこれを卒
業したのである。

8

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

郎にこの兄の思いた道に従ひ、明治三十二年の四月からこの高等小学校へ入学するために井上の家へ寄寓(仮寓)したのであった。わたくしはこの時に初めて一人だけで汽車に乗って旅をした。わたくしの村の停車場で汽車にのって姫路駅まで約十五分、こゝで又十分か待って山陽線の上り列車にのり加古川駅まで三十分位うずこれを旅とかへ平おのは少し大きさ過ぎるがしかし自分の村の内だけで動いてゐた子供にとっては数

中央公論　五月号

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

中央公論　五月号　五

へ年の十一歳になって
きることがそれほどに
ある。さうしてきたさういふ緊張がさほど滑
稽でもなかったことは、同じ車に乗り合はせ
た大人たちが、子供の一人旅をいかにも珍
らしさうに眺めて、勇りにほめてくれたこと
によっても解ると思よ。
加古川の駅へついて迎へに出てゐてくれた
従兄の潔の顔を見た時に、この緊張は解けた
のであるが、その時に偶然顔を合せた年若の

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

ことか」という訳かわたくしの記憶には
つきりと残ってます。その子は従兄の学校友
達で」或は一級位上であったかと思ふが」停
車場を出たところで偶ぶつかって」一寸立
ち話をしてゐた。その時に」今迄わたくしの隣
りて来た列車が」煙を吐きながら停車場を離
れて遠ざかって行くのが見えた。その次はま
だボギー車といふ大きい客車の出来てゐない
時分で」五十人乗の」横に扉のついた小さい
客車が普通だったので」一列車のつないで

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

中央公論　五月號

客車の數は相當に多かつたのであるが、それを眺めつゝ（おどり）その多くは、大きな芋虫見たいなものが這うて行くわと言つたのである。わたくしはこの言葉を異樣に感じて、ふとその人の顏を見たのであるが、その人は冗談を言つてゐるとも見えない眞面目な顏をしてゐた。でわたくしはその瞬間に、もしかしたらこの人は汽車といふものを知らないのではないかと思つたのである。わたくしの村で汽車の通り始めを經驗してゐたわたくしにと

12

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64　　ガラス使用

中央公論 五月号

って は、汽車を知らないというものはさほど珍らしい存在ではなかった。しかしわたくしの村などよりは随分開けてゐるこの加古川の街にさういふものゝあるのは、甚だ理解しにくいことであった。今日、山奥からでも出て来たのであらうか。それならばどうして従兄と揃つて来たのであらうか。わたくしはそれを知つてゐるのであらうか。わたくしはそれを不思議に思へばそれにつれてその子の存在が嬉しい気になつた。それでその子から少し離れたところまでくると、急いで従兄に

13

中央公論 五月号

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

そのわけをきいたところが従兄はへ大変
しと一緒にその子の言葉を聞いてあたりまえ
らはかすく一向興味のなさそうな顔をしてへ
あいつはいつて兄貴ばかり言ひやがる〇と言
つたなげであつたへつまりめなくしにはへそ
のの兄貴を兄貴として聞きわける力がへま
だなかつたのであるへそれはまをわたくしが
これまで自分の村でへこのやうなタイプ
のよい接せずへこのやうな兄貴の言ひ方
に慣れてゐなかつたことを示してゐるへ如何

（和辻用箋）

14

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

川は小さな町ではあったが、町となるとそうこれだけ村とは違ってみなのである。

その向こう岸の町は東西に長く南北はわりに短かかったので、停車場から南へ出る町行くと南の町端れへ出た。そのあたりに粟津という村があって大きい神社が往来添いにあり、その門前の方に角を焼く家があったが、そこまで来ると南方の一面の麦畑が見晴らされ、十町足らず先の北在家の村の家並が見えた。町からの道はこの村の方向へ七八町ほど直

（和辻用箋）

中央公論　五月号　五

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

線路に沿うのであるが、この麦畑の中の直線
道路くらゐ、子供にとつては少し退屈であつた。
それを歩き終へると、道は少しく南西の方へ
方向を変へ、村の中へはいらずに西の外郭を廻
つて鶴林寺の北門の前へ出ることになる。井
上の家はこゝで往来から分れて更に西の方へ
一二町入つたところにあるのであるから、北
在家の村からは一寸離れた怜悧なつてゐる。
わたくしは一年数箇月の間井上の家へみたが、
北在家の村の中へ入つたのはほんの二三に

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

過ぎないやうに思ふ。後つてわたくしの記憶にはつきりと殘つてゐる北在家は、往来に面して居る西の外部と、奥にその西にある小字の植田とだけであつて、その中でも特にわく覚えてゐるのは、往来から分れて二軒目にある瓦を作る家である。こゝは粘土をこねるところからわく瓦の形をつくるところ、それを竈に入れ火をつけるところ、焼上りのところなどわく瓦作りの作業の五らゆる段階をわく始めてゐるたゞのわく工場である。

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

この屋作りの家の西側を幅一間位の小川が
流れてゐた。これは加古川から引いた灌漑用
水の流れで、鶴林寺の西側を屋上の松の方へ
流れてゐたのであるが、それにかゝつてゐる
石橋を渡ると畑もなく左の方も樹木に入つて
行く道があつてくらか上りになつてゐた。
従つて植田といふ小字は、周囲の田地よりは
三四尺位高くなつてゐるやうに思ふ。この地
勢が子供の眼にもはつきりと映つてゐるのは、こ
の年の夏豪雨の際に加古川の堤が切れて、こ

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

あたりが一面に水浸しとなつた時であつた。
北の方はかな川の町まで、南のうは尾上の松
林までまるで湖のやうに眺められたのであ
つたが、鶴林寺の境内や北在家の村は島の
うになつて殘つて居り、そこから二町ほどの
水を距てて（かどり）植田をまた小島のやうに水から
出てゐたのである。
井上の家はこの植田の四五軒の人家のうち
東北の端、即ち鶴林寺の北門に最も近いと
ころにあつたが、しかしその家の入口へ出る

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

あれは、大分まはり道をしなくてはならないのだ。といふのは、この小さい入る道は井上の家とその西側の家との間を南に向つてはいつてゐるのでゐて、井上の家の西側面を通り過ぎたところがちやうど小さの中央になり、そこから井上の家に沿つて東南へ折れ、小さの端まで行くと、そこが井上の家のちやうど南端になつて居り、そこに家の前の一寸した広場やうに思ふ。入口は精確には東南に向いて居り、

入れなどがあつたのである。門はなかつたや

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

その前の広場の東南の方が菜園になってゐて、
そこから七、八(ほど)下りると、田一枚を
距(へだ)てゝ前に言つた小川が流れてゐた。
この井上の家はこの時から五六年後に改築
したので、改築前の古い姿はだん〳〵(だんだん)に
なつてしまつたが、母屋は藁葺で、東南に向
いて井(ゐど)に入口があつた。その南の側に
入口の右側には塀が突き出てゐて、そこに木
戸があつた。それを入ると台所口があり、
その前が中庭のやうになつてゐて、そこに隠

（和辻用箋）

21

（和辻用箋）

05

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

あつて、それにくぐり戸がついてゐたやうに
思ふ。また、その仕切りも板壁ではなく、細い
縦格を並べたもので、くぐり戸が、元から塗つた
のか、黒くおんだ色になつてゐたかはくぐり
黒よく、しかしその土間と茶の間や座敷などの
間かどういふ風になつてゐたかはくぐり
つきりしない。
茶の間は玄関の奥にあつて、北側の庭に面
してゐた。茶の間の隣りに座敷があつたやう
に思ふが、そこへは滅多に入らなかつたので

中央公論　五月号　五割

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

記憶に強くないのは無理もないとして、一年
余りの間毎日食事をした茶の間のことはく
う少し覚えてゐてもよさそうなものであるが、
童外にこれと記憶に強ってゐない。
しる供部屋は入口の左側にあつたく。格子窓が
東南に向いてゐます。六疊の部屋で、その
上に中二階がありく、藁屋根とは別に庇葺の屋
根が集ってゐてやうに思よく。わたくしはこの
六疊の部屋で一年の間従兄の膝と机を並べて
ゐたわけであるから、その机がどういふ机であ

(和辻用箋)

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

つたかと思い出すことは出来ない。僅かに覚えてゐるのは、その中二階にいろ（おとり）な書類や書物が積み重ねてあり、その中の面白さうなのを引きずり出して讀み耽つたことであつた。その頃出てゐた帝國文庫も十數冊混つてゐたが、中に、西鶴全集、大岡政談、漢流李談全集などのあつたことも覚えてゐる。これらは讀んだせいで覚えてゐるのであらう。ほかに八犬傳があつたかどうかはつきりしない。わたくしはこの聖年頃に八犬傳を讀んだから、その

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

時の本は帝国文庫本ではなかった。
一冊
一行アキ
井上の家にかういふ本があったのは叔父
の政治的さういふものに無味を持ってゐた
からだと思ふ。それについてこの叔父の面
影がいろ〳〵（おどり）と思ひ出されてくる。
この叔父は毎晩白酒を二本位づゝ（かたず）いかれも
楽しさうに飲んでゐた。その白酒は新潟から直接取り寄せ
来た吹に、四斗樽で灘の方から
るので あるから その輸送には陸路でなく海路

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

を選んだ。海路と言っても灘から高砂までは
僅かな距離なのであるが、小さい船に積まれ
て波に揺られようとゝ、櫓の中味は非常に味がよ
くなるのだといふことであった。わたくしが
井上の家へ移ったのは三月の末であったから、
その年の白鹿の樽が着いてからまだ日のない
頃であった。お父はいかにも筆蒔さうに暖炉
をかこみながら、何かしら盛んに裏畑をあたゝてゐた。毎晩の
ことであるから随分いろ〳〵な話を聞いた筈
であるが、大抵のことは覚えてゐないやうな
（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

れたが（カトリ）一つ〳〵はつきりと覚えてゐる。それは豊沢團平に関聯した人形浄瑠璃のことゝ三味線音楽のことである。

豊沢團平は明治時代に歌舞伎芝居において市川團十郎のやつた役割と同じやうな仕事を人形浄瑠璃でやつた人だといはれてゐる。明治維新の変革後に〳〵滅亡の怖れのあつた人形浄瑠璃を〳〵（おもりにちがひ）持ちこたへたのみならず〳〵それに新しい生命を吹き込んだのは〳〵主として彼の力によつたのである。その團平の（がセナニオで）弟子の（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

十一年の四月の初めであつたかそれとも
井上の家へ移つたその翌年の同じ頃なの
であるからくするとよると二間ごの催促しか付
かでくお父の関心を特に刺戟ますやうなことも
かあつたのかを知れないくとにかくお父は
人形淨瑠璃や三味線のことを何も知らないわ
たくしを抱へてくその時後見して徒見はこの種のこと
ゐて笑であるからくさうして徒見はこの種のこ
とについてすでに幾ゐかの開かされてゐた筈で
すからくその点については何も覚えてゐないく

中央公論 五月号 五割

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

加筆

澤瑞璋や三味線音楽がいかにすぐれた芸術であるかを説々と説き聞かせてくれたのであります。

その時叔父が、三味線はたゞ三本の糸であります。

かく、その三本の糸で実に多様な音を出すことが出来るといふ意味のことを言つたのを、ふいと思ひ出して、それが三味線といふ楽器についてのことであつたかく、或は国平の三味線の技術についてのことであつたかく、多分後の場合、

即ち国平が澤瑞璋の内面的な意義を音楽的に

30

表現しく それによって準瑠璃に新しい生命を
吹きこんだく といふことを説明してくれたの
であったかと男のく
この時に叔父はく 風平かカ九州の生れであ
るといふことを言はなかったく しかもそれがく
北在家の方へ来るかなり前の町端れの栗津であ
るといふことをその時に聞いたをすればく そ
の後栗津を通るたび毎にそれを思ひ出したりして
知れぬのであるかく 叔父はそんなことも言はな
かったく 洗ん物屋平か井上の家と縁続きくら
(和辻用箋)

国立国会図書館 タイトル『自叙伝の試み』 請求記号 WB12-64
ガラス使用

園平の家とは
何程かの縁

の初めの細君が
井上の親戚か
ら行ってゐたの
だそうであ。
その関係で

なるなどといふことには、一言も言はなしてなか
ろによと、
うた。
聞いた
頃
伸伸が前妻（園平）家と井上の家
との縁が疎くてあのだとのことも
報仗はそれを知ってゐるのかどうか、明かで
ない。たとび續きであったとしてもそれは
外親戚として意識する範囲にはなかったと
いふことであり得る。
隈に名をなした後の園
平は、時折加古川へ帰省したとのことである
が、その時園平が親戚として井上の家へ立寄

（和辻用箋）

32

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

園平の家とは
仔細かの接
觸かあつたり
しくい従弟の
の潔は、園平
かせくなつた時の
香奠返しの
ふくさを覚え
てゐることのことで
あつた。

もといかわらないとさ
ともにかく園平の家と関係のある菓津の寺は
井上の家の檀那寺であつたし、園平が幼時育
てなどいふかたちの
親戚の梅窓といふ隠
行き来してゐたので
と親といふものは感
も知れないと
わたくしはその頃人形浄瑠璃といふものを
見たことも聞いたこともなかつたのである

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

ら、叔父のいふことを理解し得たとも思はれないのであるから、といふわけかこの時叔父が三味線楽について言つたことや、夢状風平といふ名などを、くだくだしく書き並べたのである。叔父の面影を思ひ出さうとすると、ふとこの時の叔父の聲が聞えるやうに思ふこともある。それはよほど印象が濃かつたのであらう。また叔父がこの晩酌の時に何かに感激してゐたことを示すのかも知れない。それを思ふと、というやうな風平の一周忌といふことと関係があ

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64　　ガラス使用

りそうれ思へこのい
一年
一行半
この叔父のところへわたくしより二歳年上の従
がが嫁いで来てくわたくしの父の妹のす
兄とく六歳位年下の従妹とか出来てゐたく
かし叔父はくその頃この地方の地主が通例さ
うであつたやうにくあまり忙かしい仕事に手
を出さずくもつぱら郡役所へ勤めてゐるだけで
あつたのでく叔母の仕事もわたくしの母親ほ
ど忙しくなくく従つてわたくしの見わたくし

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

て世ったのであるかく その手紙あは近所の名
所への案内であったと思よく すぐそばの寺
堂はいふまでもなくく 十町ほど南方には尾上
の松かありくそこから東に半里ほど西へ行く
と高砂の松があるく 曽根の松といふのは高砂
から東に西の方一里位の所であるかく 加古川
の方から行くと一里位で石の宝殿があり
そこから東に半里で曽根の松に達す
ることになるく われくしは何でこれらの名所
を過はつたかを覚えてゐないかく とにかくこ

この年の四五月の頃に、これらの名所とすっかり馴染になった様に思よ。特にそれから四五月の頃であったことを示してますのは、尾上の松林で松露を取った経験である。めなくしとしては松露取りはこの時が初めてであったのだ。非常に印象が深い。山陽電鉄がこの松林のそばを通る様になってからは、この辺りの景色はすっかり変ってしまったですっかり。その頃は実にひっそりとした松林で、松露非常に沢山あった。西瓜かの五人女の初め

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

のお夏清十郎の物語の中に、尾上の花見の場面を描いてゐるが、そこに里の童らの松露取りのことを特筆してゐるのを見ても、松露が古くから尾上の名物であったことは解る。かたくしはさういふ昔のままの尾上の松林に接したのである。

序ながら西鶴の尾上の描写は、西鶴が尾上の土地を知らずにたゞ名前だけを使つたので、あることを示してゐる。そこに描かれてゐるのは多分大阪の郊外、住吉あたりの春の野辺

中央公論 五月号 五割増
(和辻用箋)
39

中央公論 五月号 五割増
(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

ども花見の騒ぎの実況なのであらう。娘子の
町の人たちが春の野遊びや花見に尾上まで出
かけるなどといふことは、あり得ないことで
あつた。わたくしは娘子中ほどの時、校花の
好みで毎月一回づつ行軍をやらされ、娘子
路から日帰りで行けよ程近のところへは随分
方々へ歩かせられたのであるが、かた川も尾上もさ
ういふ行軍の領域外にはあつた。高砂もおなじ
かに蕎根の松だけがこの行軍の目的地たり得
たのであつた。かうに西鶴の描くところのよ

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

ると、姉妹の但馬屋の一家が、春の野遊びをするといふので、女たちを駕籠にのせ、清十郎が拿捕をして、尾上あたりまで出かけること、なつてゐる。しかも、高砂尾松の松も若緑立てゝ、砂濱の景色また格別あるまじき詠でかしと言つて、すゐに松露取りの詠に續いてゐるのである。松露のある四五月の頃に高砂や尾上の濱の松の若緑といふことであるから、それらの若緑や尾上の砂濱の景色かゝしてゝ一眼に見晴かせる

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

景色である。かの如くに書いてあるのをおかしいのである。高砂の松と澤桐の松とは、東西に一里ほども離れてゐる。また、その澤桐の松は海岸から半里位離れて居り、尾上の松林を十四五町は海岸から引込んでゐる。一眼に海の見晴らせる砂濱に松林が拡いてゐるといふやうな景色はこゝには無いのである。尤も尾上の松と海岸との間の一面の水田や畑は、澤桐の松と海岸との間の水田や畑よりは、西鶴の時代以後に開墾されたのであつて、西鶴も時代には全く海

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

岸が近くまで来てゐたかも知れぬ。しかしその時でもくこれぐの名所の間には、幾いて一時間とか半時間とかを要す距離があつたわけであるから、一眼に見晴らせるやうな野辺の場所ではない。況んや姫路から幾いて日帰りで野辺に来られよう筈はない。その点、西鶴の取扱ひ方は、電車で手軽に姫路から来られるやうになつてゐる現代に近い。と言へるのも知れぬ。

「松もその作の中で「尾上の窓」を使つて

(和辻用箋)
43

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

ある。（二行）用明天皇職人鑑の三幕目に謡曲の（音成寺）を取り入れ、ことを面白く、その場面に尾上の滝を選んだのであるこの滝で鐘を海から引上げ、その鐘の供養をする場面で、道成寺と同じやうな手伝が起こるといふ風になってゐる。こうしてゐるうちに松露を取った尾上の松林は、海から十四五町も離れてゐるのであるから、尾上の滝などといふ感じのまでないものであった。しかし尾上の鐘は海から引き上げたといふ体裁を皆

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

見つてゐるそのであり、また近松の時代には
海がよほど近くまで来てゐたかも知れないの
であるからく近松の尾上の浦の使ひ方は、西
鶴ほど現実を無視してゐるとは言へないに
高砂の松く、雪松の松く、石の宝殿などについ
てはく尾上の松林の松露のやうにはつきりと
覚えてゐるものがないがく、しかしとにかく麦
のまだ刈り取られないうちにこれら名所は皆
開墾になつてやすい男よく、その間に新しく入
学した高等小学校でどういふ経験をしたかは

（和辻用箋）

中央公論　五月号　五印

（和辻用箋）

46

私など覚えてゐないが、たゞ一つ思ひ出せることは、前に鶏の林に風立ちてゐるといふ俳歌の印象を取り上げた時に言なした遠足である。この遠足は、かつて加古川の町に新しく出来た日本毛織会社の工場を参観するためであつたと思ふ。この会社は今では非常に発展して、加古川の両岸に建ち続き数多くの工場や工場関係の住宅街を設け、広大な地域をしめてゐる。かく明治三十二年の四五月頃には、加古川の左岸の鉄道線路ぞひに建てられた小さな工場

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

に過ぎなかつた。煙突はたゞ一本であつたし、工場も煉瓦建がたゞ一棟であつたやうに思ふ。

丸もその一本の煙突でも、われわれの眼を見張らせるには十分であつたし、われわれはそれまでにこんなに大きい煙突、またこんなに高い煙突を見たことはなかつたので、その根元に立つて空高く聳えてゐる煙突の先端が小さく見えるのを、驚歎しつゝ眺めたものであつた。

それ一位であるから、工場の中へ入つて機械の動くのを眺めれば、直ぐに感歎した筈で

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

中央公論 五月号 五四

あよか(ら)
その機械については
とうてはっきり
とした印象が残ってゐない。今振りに思ひ出
す努力をして見てゐ(る)が、曖昧ろに浮んで来てくるのは、
恐ろしく機い粗毛を送る場所のあったことと、
動力が帯革によって伝へられて紡績機械全体
を動かしてゐるのを眺めたことと
位のものである。毛織物を織ってゐる場面な
どは(い)というも浮び来ない。こかしこの会
社では(粗い)羅紗や毛布などを作るので、あまり精
巧な毛織物は出来ないのだといふ説明は尚い

思い出さうとすると頭に浮んでくるのは、中学の

一年生の時の小学校ではその頃まだ小倉地の制服を採用してゐたとのことであるが、わたくしはどうもその形や着心地などをはつきりと覚えてゐない。

たゞうに思ふ。さういふ粗いを繊維でもつてにかく日本で作り始めたといふことから当時としては社会の耳目を惹いてゐたのである。

その頃わたくしたちは毛のものは全く身につけてゐなかつた。着物は木綿の絹ネルであつた。中着は洋服であつたがその洋服と小倉の短い小倉地の制服であつた。

一年生は毛織物として保温上の機会の多かつた

（和辻用箋）

（これらでもそれ程おかしな地で、生活にはなかつた。）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

のは、赤毛布と羅紗の軍服とであった。赤毛布があんなに流行ったのは、日本の大衆の毛織物に對する好奇心に付け込んだ貿易商の仕業だと思はれるが、あのお蔭でも繃帯の特徴かの白い人によく飲み込めたと思う。軍服は羅紗がいいらしいということも、それと連関して急速に認識されたであらう。さういふ一との結果としてまづさういふ粗い毛織物を作るために日本で毛織工業がもてはやされたといふことはいかにも自己であったといってよい。

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

赤毛布が毛織物使用の第一歩であったとすれば、あの毛織工場が出来たのは、毛織物生産の第一歩であったと言へるであらう。つまり赤毛布と相会して、毛織物を日本化するといふ仕事の最初の一歩を示してゐたのである。わたくしたちはその最初の一歩を見に行ったわけであった。

その頃のわたくしたちに半世紀後の日本の姿がまるで解らなかったことは、少しも無理のないことであらう。恐らく毛織会社の若す

中央公論 五月号 五〇
(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

（一行アキ）

者と雖くこの会社の将来かこれほど大きいと
いふことは〳〵謙遜してゐるなかつたと思ふ〳〵
たくしはお供の時には〳〵中学の制服以外には〳〵
悉く和服で育つた〳〵おたくしたちのお供の時
代には和服と洋服が半々になつた〳〵孫の時代
になると〳〵和服は殆んどないに等しい〳〵つま
り和服が洋服に変はつてゐるのである〳〵習慣の変移はさういふもの
なのであらう〳〵

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

51

戸田の高等小学校に入った時のこととして
という一つはっきりと思い出せるのは、蜀山
波の『世母お伽噺』から『少年世界』
めたことと、さういふお伽噺の本や少年世界
などを買い本屋が加古川になかったと見えて、
直接陳楽の博文館へ注文して送って貰うとい
ふ方法を覚えたことである。
当蜀山人波はそれまでにもう日本昔噺や日本
お伽噺などを出しく雑誌の『少年世界』の主筆
をおってゐた。日本昔噺の出た二十三年頃

（和辻用箋）

52

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

には、わたくしはまた小さかったし、兄はちょうど井上の家へ預けられてそこの高等小学校へ通い出した頃であったから、刊行当時にこれを買ふといふ機縁はなかったと思ふ。次で「少年世界」が創刊されたのは二十九年には、兄はまだ戸お伽噺の出始めた二十八年、2字 日本国の学校にゐたから、その翌三十年には娯読中学へ入ったのであるから、兄が時々娯読の本屋の店頭に立つやうになった時には、なほ続刊中の日本お伽噺や、子供の雑誌で昔も数万

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

のあった少年世界などは、庭頭の目立つ存在であったと思はれよう。さういふ関係で日本お伽噺の本のやうなものは、刑行当時兄がめたくしのために買って来てくれたのではなかったかと思よ。因縁の息の浜などはというその頃に読んだやうに思はれる。少年世界も、小学の三四年の頃には、かたくしは愛読してゐたやうに思よ。大抵子の主人公は、お伽噺の出てくる子供のハカ傳の浜であるとか、露の玉を女の子に見立てたとか、十五少年の冒険流浪の苦しみの浜であるとか

55
（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

険譚とかはというもその頃に讀んだおぼえは
ないくらいだ。
さういふ境優でくに小波もそのお伽噺もわた
くしは既に馴染だつたのであるからくその
小波が今ふたゝび新しく世界お伽噺のシリーズ
といふ叢書は相当に強くわたくしの関心
を刺戟したのであるがくしかしわたくしがそ
れを知つた時にはもう最初の一冊の世界の初
めといふ題であつたやうに思ふのは刊行済で、
二冊目がまさに出ようとしてゐる時であつた。

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

それは五色の石といふ題であつたかと思ふ
がわたくしは一刻も早く手に入れたいといふ気持になつて、懸賞文鉛へ直接に注文すること
とを考へたのである。これは或は従兄の入智慧であつたかも知れないが、当時の書物の広告には版元への直接注文を勧誘する文句があつて、そこに郵券代用一割増と記してあつた。それに従ひ手近の中に郵券で十何銭かを封入して、欲しい本の注文をしたのであつた。

世界お伽噺か八銭であつたか十二銭であつた

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

かはは つきり覚えないが、とにかく定價の一
割增に送料を加へよと十何錢かになつたので、
まづ定價は勿論十二錢だつたのであらう。さういふ注文の手紙をもらつてから本が郵便で届くのを待つ間は、まことに樂しいものであつた。

少年世界のやうな雜誌もかういふ仕方で購讀したのであつたかどうかは、とうとはつきりとは覚えてゐない。が、郵便(切手)代用一割增で本代を送つたことはさうであつたその何

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

回目かの時に、北在家村の切手を寄ってゐる
度で、生憎切手が少しかなく、わたくしの
必要とした枚数に一二枚足りなかったことが
あるので、何喰次の日まで待てば手に入るのであ
るが、一日も早く見たいという気持で駆けつ
けて来たのであるから、どうしても待つとい
ふ気持になれなくて、足りない部分だけ葉書
を買って来た。それでもその葉書を切手と一
緒に封入して送れば差支なかったのであるが、
切手代用という文面に拘はって、葉書では駄

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

自だと思ひ込み、葉書の切手に相当する部分を丹念に鋏で切りあいて、それを切手に混ぜて送ったのである。葉書はその頃一銭五厘の楕円形の模様が附いてゐた。ところがその手抜を出してしまったあとで、多分後兄が教へてくれたのであらう、葉書の切手に相当する部分を切り抜けば、それは無効になると解つた。かたくしはすつかり悄気てしまつた。いつそならば折返して本が届くまでは、淳きりした気持でゐる

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

であるが、この時は毎日来がいであった。
東京から何と言って来ようとそれば
りが気になってゐた。もう
何の故障もなかったかのように、いつもと同
じやうな口限で、ちやんとわたくしの手に届
いたのである。この時は実に嬉しかった。
文銭という本屋が、実に親切な、好い店の
うに思へた。薬書を取り扱いたのは無効にな
ったではあらうが、わたくしの方でそ
れだけの金を捕ってゐることは認めさせてゐ

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

けであるからくそれを認めて送ってくれたの
であろうとわたくしは解した。実際その時の
外交館の係の人はく切り抜いた葉書に表現さ
れてる少年の気持に同情いてく特に実大に
報ってくれたのであったかも知れない。
さういふ風にして時々北在泉村の切手を貰
う度を訪れたわけであるが、或る日その度の
近くでく往来にある太雄鶏が急にわたくしを襲
撃して来たことがあるく。わたくしは力一杯足
で雄鶏の脇を蹴飛ばしたがく雄鶏は少しもひ

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

中央公論　五月号　五

つまず敵撃をくりかえした。でわたくしは何分
向か雄鶏との格闘を續けた。多分敵が疲労
なってきたことと思ふよ。よほど聲をあげて救
けを呼ばうかと思ったが、何となく見ても
ない気がして、薬を喰ひしばって格闘を続け
た。たうとう雄鶏はおきらめて退却して行つ
た。その時わたくしの脊丈は、雄鶏の倍はな
かつたであらう。

63
(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

初めて死とその

自叙伝の試み

(十七)

中央公論 昭和 年 月号

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

自叙伝の試み（十六）

和辻哲郎

初めて死というものに
自叙伝の試み（十六）
和辻哲郎

太子堂のほとりでの生活にすっかりなじん
で来たと思われる頃、わたくしは突如あら
しの襲来に逢った。兄の大病の知らせを受け
たのである。
それは六月も末に近い頃ではなかったかと

中央公論　六月号　五印

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

思よ。或日、教場で授業を受けてゐる最中に、
小使が入つて来て教師に何かを言つた。その
中にわたくしの名がはいつてゐたやうに聞いて、はつとした。教師はすぐわたくし
の名を呼んで、何か急用で家から迎ひの人が
来たさうだから、直ぐ帰るやうにと言つた。
その時学校へ迎ひに来たのが誰であつたかは
まで覚えがないが、とにかく学校を早退け
して井上の家へ帰つて見ると、そこには仁蔵
野の家から車夫の捨さんが来わたくしを迎ひに

（和辻用箋）

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

中央公論 六月号 五円

来てみた。兄が病気で重態になったから、急いで帰って来いという知らせを持って来たのである。

わたくしはこの知らせを聞いた瞬間のことを一向に覚えてゐないが、すぐ身支度をして捨さんと一緒に加古川の町へ向って歩いて行った途中のことは、姉にはつきりと覚えてゐる。井上の家を出てから間もなく灌漑用水の小川にかゝった石橋のところへ来たが、こゝから近道をするために、石橋を渡らず、小川

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64　　ガラス使用

中央公論　六月号　五印

を伴って、北在家の村はづれで加古川への街道へ出た。そこからこの街道を二三町、北在家の村のはづれと同じあたりまで進んで行くと、街道が斜左へ方向を変へると共にあとは一直線に栗津の神社まで通じてゐる。この直線路は七八町位のものであつたらうか。子供心にはこの直線路の單調さが北栄に苦痛であつた。多分その せいではこの時に捨さんを案内して街道から離れ、依然として同じ方向へ田の中の細い道を辿つ

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

て行つた。この道も真直に加古川の町の方へ
通じてゐるとは同じであつたが、細い道だ
と先の方がはつきりとは見えないので、單調
な感じを與へなかつたのかと思よ。わたくし
は捨さんと並んでこの細い道を歩いてゐた時
のことを、特にはつきりと覚えてゐるのであ
る。この時この細い道の両側の田はすでに田
植がすんで、水がなみ〳〵と湛へられてゐた。
さういふ田中の道の草の上を歩きながら、わ
たくしはいろ〳〵と兄の病気のことを質問し

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

た。少しでも明るい望みの持てるような報道を引き出したかったからである。しかし捨さんは兄の病気に関してあまり詳しいことを聞かされてゐない。わけではなかった。その時に捨さんの答へた言葉は全く覚えてゐないが、かしいくら突っついて見ても、兄が大病であるために、その見舞ひに一寸帰って来い、といふ言傳を持って来た、といふ事以外には何も解らなかった。でめたくしは、それだけの事実に基いて(に)と推測をめぐらした。

中央公論 六月号 五印

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

兄の病気が非常に重く、殆ど死の状態になって
あればこそ、わたくしを迎いに来たのであら
う。回復の見込のある病気ならば、釜に帰
って来いなどと言ってくる筈はない。これ
と、兄は死ぬかも知れないのである。こ
は大変なことになった。車によれば、捨さん
が家を出たあとで、兄は死んでるったかも知
れない。さう思って捨さんに、何時頃家を出
たかなどと聞いてゐる。捨さんは八時一寸前
に仁豊野を出る汽車に乗って来たのである。

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

て見ようとそれから三時間あまり座ってゐる。今のこの時刻には兄はどうなってゐるか、それは捨さんも知らないのである。さういふことを考へてゐると、氣持はだん〳〵滅入って行く。それを側から伊藤とか賀川やうな氣轉は、捨さんにはなかった。わたくしは先が真暗になったやうに感じた。

しかしこの時にはわなくしは、神様に救ひを求めるといふ氣持にはならなかった。それが何故であるかはわなくしには解らない。こ

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

の時から一年か二年ほど前に、兄が野球をや
りに行って夜遅くまで帰らず、家中で騒いだ
時、一人自分の部屋に引籠って、お構に兄の
無事を祈ったことは、前に一寸書いたが、そ
の同じ兄が（前）の時よりも一層甚だしい危険に
瀕してると知った今、どうしてだか（同じ）
やうな気持にならなかったのである。捨さん
が一緒に居てゐたせいであったかも知れな
い。或は親たちが心配して騒いでゐ様子を
じかに自分の眼で見なかったせいであった
（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

12

も知れない。がその代りにわたくしは、この
時に初めて〈死〉ということものの恐ろしさを感
じたやうに思ふ。それまではもわたくしは〈死〉
ということを知らなかつたわけではない。村
で人が死に、葬式をする、という現象は、見て
知つてゐた。家が醫者であるから、病氣で人
の死ぬことを耳にすることも屢々あつた
と思ふ。殊にわたくしは弟の死を経驗し
た筈である。しかしこの弟は生れて間もなく
死んだので、その時のわたくしの家の中に起

中央公論 六九号 五巻
(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

つた何とも言へない異様な雰囲気を感じただけで〈死〉（その時点に）という観念さを感じ取つたわけではなかつた。それは一つはわたくしがあまりに幼く、知能がまだ発達してゐなかつたせいであらう。しかし今はその時から十七年を経つてゐる。〈死〉というそとの意味は何となく解つてゐるやうな気持ちでゐるのである。しかしそれが自分と密接な関係のあるものだとは、まだ理解してゐるかつた。今は、その〈死〉というものが

(和辻用箋)

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

わたくしの兄をわたくしから奪い去ろうとしてわたくしの前に現はれて来たのである。

わたくしはさういふことを考へて、わたくしに離れなかつた。それは実に突然に、ひよつて来たといふ印象を与へた。

わたくしは今更のやうに兄のことを考へ、兄が自分にとつていかに大切な人であるかをしみ〴〵と感ずるやうな気持になつた。兄はわたくしより六歳の年長であつたし、わたくしが満四歳になつてもなく同じこの井上

中央公論 六月号 五印

(和辻用箋)

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

15

の家に預けられて母方の高等小学校に通うようになり、わたくしとは離れて暮らしてゐたのであるから、小さい時に兄と一緒に遊んだ記憶は殆んど残つてゐないが、それでも兄と一緒に母の側に寝かされてゐた頃のことは朧ろに覚えてゐる。或る朝わたくしは、何が気に入らなかつたのか、寝床のなかで兄に武者ぶりついて行つたことがある。兄は少しも抵抗せず、あつさりと負けてくれたので、それきり済んでしまつたが、わたくしは何となく相

中央公論　六月号　五印

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

子抜けがして、物足りない気持になったことを覚えてる。また、帰る時は、兄がわたくしをねんねこ半纏でおぶって、裏口から家の外へ出て、村の西側を流れてる小川傍ぞいに、田の間の畦道をしばらくの間歩き廻ってくれたことがある。その時には麦畑のうねに電柱が立ってるたやうに思ふ。これがどういふ機会の歩素子であったか、まるで覚えてゐないが、多分わたくしが病気でしばらく寝てゐた時のことでであらうか。多分そ

中央公論 六月号 五印

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

17

清水

の前後のことから、兄が小学校へ行くのにくっついて村はずれまで行ったことがある。村の南の端にその頃朽ちかけた女中の家があって、多分その頃そこに兄との同級生でもあったのであろう、兄と一緒にその家の土間へ入って行ったことを覚えている。竈に火が赤々と燃えていた。さういふ断片的な記憶が少しく残って居る程である。しかしその兄は夏冬の休暇には家へ帰って来たのであるし、二年前に姫路の中学へ

中央公論文芸論文原稿用紙 (和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

入ってからはもっと数々と家へ帰って来てる
五笑であるから、お供らしい遊びをわたくし
と一緒にしなかったとしても、いろ〳〵な点
でわたくしが教へられ導かれてることは疑
ひない。わたくしはそれらのことをはつき
りとは覚えてゐないが、わたくしにいろ〳〵な
譚み物、例へば少年世界とか小波のお伽噺と
かを供給してくれたのも、父や母ではなくし
て、兄であったのだらうと思よ。だからわた
くしは心から兄を尊敬し、また頼りにしてる

中央公論 六月号 五印

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

たの何か解らないことがあれば兄のところへ
尋きに行き、兄の教へで満足してゐた。ほか
のお供たちとの遊びの際にも、兄の導へる保
護が何となく慈ぜられてゐたやうに思ふ。そ
れは男田の高等小学校へ来たときにも感
ぜられたことであつた。だから兄を頼りにす
ることは、物を覚えてゐる故郷のわたくしの習性
のやうになつてゐたのである。
その兄を今突然奪はれるのだといふ。わた
くしは全く打ちひしがれた気持になつた。さ

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

ういふ暗い気持で田の中の狭い道を辿って行つたところまでは、覚えてゐますが、それからすぐこでどういふ風に街道へ出たかといふことに就いては、全く覚えがない。気づいた時はその後のことで、どういふ風に汽車にのったか、姫路でどういふ風に播但線に乗換へたかといふ風なことになると、一向覚えがない。めたくしはたゞ兄を奪ひ去られるのだといふ悪夢に押へつけられてゐたのである。

仁豊野へついたのは午後のまだ早い頃であ

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

中央公論　六月号　五印

った。よく晴れた日で、太陽がかん〳〵照り
つけてゐた。わたくしは喘ぐやうな気持で家
の中に入って行ったが、家の雰囲気には少し
も暗いところはなかった。そこでまづ一安心
して兄の病室へ行った。兄は佛壇のある祖父
直心の部屋の隣りの八疊の座敷に寝てゐたが、
わたくしを見ると元気さうに笑った。兄の病
気は、その日の午前中に峠をのり越えたかの
やうに、急に形勢が好くなって来たとのこと
であった。もう大丈夫だと父は言った。その

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

関係で父も母も非常に喜んでくれさうであつた。わたくしは一挙にして悪夢を吹き飛ばすことが出来たのである。幸ひにして わたくしの苦しみは数時間で終ることが出来たが、その(僅かに)数時間の(はあつても)、実に何とも言へない軽々とした気持になることが出来た。それをわたくしは、何かの恩寵を受けたといふ風に感じたのである。

この時の兄の病気は脳膜炎だと聞いたやうな思ふ。兄はその頃中学の三年で、学校の寄

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

宿舎にみた笑であるが、発病の一寸前に筆丸に痛みを覚え、不思議に思って診て貰ひに家へ帰って来て、家で発熱したのであったら、病革の際し寄宿舎で発熱したのだといふ。もう通ってゐたかも知れない。それを思ふと早めに家へ帰って来たことそ何かの因縁であったかも知れない。朧ろげな記憶であるが、その時わたくしの母が剪りにさういふ類のことを云った(おう)に思ふ。実際この病気かわりに軽くですんだことは、何かの因縁だといふ

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

深緑

ほかはなかったのである。

見舞に帰ったわたくしは家へ結晩泊ったが覚えてないが、多分一晩位ですぐまた井上の家へ引返したのではないかと思う。とにかく、兄の病気はもう心配はないとはっきり言ひ聞かせられて、安心して帰って来た。この出来事の際の記憶(意)としてわたくしは、座敷に寝てゐた兄の敷のほかに、そう一つ小さい蒲団が敷いてあったのと、その上の姉はかのとそたちのことを覚えてゐるが、不のって、もう四つか五つになってゐたが、

中央公論 六月号 五円

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

225

姉の巻は、その年の三月十日に産れたばかりであつた。わたくしはそのお宮詣りをすまない内に井上の家に移つたわけである。その赤ん坊は僅か二月ほどの間にいかにも赤ん坊らしく大きくなつてゐた筈であるが、その方の記憶はあまりない。それよりも上の姉の方が、僅か二月ばかり離れてゐた間に、わたくしを見忘れて、(アト)「恥かしがつてそばへ寄りつかなくなつたことを、わたくしは愛えてゐる。わたくしは何となく物足りない、といふよりもむ

中央公論　六月号　五印

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

中央公論　六月号　五印

中央公論　六月号　五印

くろ勿忙しい気持になって、何とかしてもとのやうに可愛がりたいと思って、あとを追ひかけたが、逃げ廻ってゐて捕まらなかった。これは少し日が経てばおのづから消えてしまふ幼児のはにかみであったのであらうから、その点からもこの時わたくしが一層位くか追らなかったことが推測される。

（和辻用箋）

一アキ

めたくしは兄の病気のことをもとしろこの姉のことを心残りに感じながら、また太子

中央公論　六月号　五印

27

堂のほとりへ帰つて行つたのであるが、その後一二ヶ月で起つた出来事を思ふと、この心残りの感じがすでにその識をなしてゐるためである。

その出来事といふのは、かのといふ上の妹の死である。それは夏休でわたくしが家へ帰つて来てから間もなくのことであつたから、早くともその年の七月の末か八月の初めであつたであらう。

兄の病気が田植のすんだ頃であつたとする

中央公論　六月号　五印

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

と、この時までには二月あまりしか経ってない。今なお長い夏休みであるから、妹があんなにわたくしを恥かしがるのを何とかしてもとに還すことが出来るまで、もう少しの間そっとしたいものだなどと考へながら、家へ帰って見ると、妹はもう病気で寝てゐて、わたくしを見ても不機嫌な顔をしてゐた。病気は何であつたか覚えてゐないが、わたくしたちの若い頃までは多くの子供の命を奪ひ去つた疫痢であつたかも知れないその後数日して七

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

くなったのであるから、その年の三月までの
やうにわたくしになついて愛らしく笑ってる
たこの妹の顔は、送に見ることが出来なかつ
たのである。

その日の朝、どういふわけであったか、わ
たくしは祖父から使に行くことを命ぜられた。
普通なら車夫の捨さんか誰かが行く筈の使で
あるが、さういふ人たちに差支へがあったの
か、或は祖父がわたくしを仕つけようとして
わざわたくしに命じたのであったか、それ

中央公論 六月号 五印

(和辻用箋)

中央公論 六月号 五印

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

はわたくしは解らない。とにかくわたくしは昔風の革の文箱（ルビ ふばこ）を持って、川向ふの皇国という村へ行き、何の某の家を訪ねて、その手紙の返事を貰ってくることになった。その某の家の前には小さい蓮池があるということであった。わたくしはその村も知ってゐたし、そこまで行ってくる位は何でもないことと思って、気軽に家を出、前に遊び慣れてゐた舟つき場で涼しく舟に乗って、市川の流れの向う側の川原へ渡った。そこから、丸い川石のご

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

中央公論　六月号　原稿

(和辻用箋)

〳〵と並んでゐる川原の中の細い道を上流の方へ斜に三四町位も辿つて行つて、高さ一二間の松の並んでゐる土手へ向ふ岸へ渡り、そこから村を一つ通り越すと、目ざす重岡の村へ出る筈であつた。ところが、その川原を歩いてゐる時に、幾羽かの鳥がすぐ側へ下りて来て餌をあさつてゐた。その鳥がすぐ側へ行つた位では中々飛び立たうとはしなかつた。それを見てゐるうちに、わたくしの心の中で湧き出てゐた姉の病気の心配が、ふとその鳥と

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

結びついたのである。小石を投げてあの鳥に
当てることが出来たら、姉の病気は必ず癒る
であろうという考えが、ふと胸に浮んで来た。
近くに下りてゐて中々逃げようとしない鳥に
は、容易に小石が当りさうに思へて、さうい
ふ考が浮んだのであつたかも知れない。で、
小石を拾つて近くの鳥に投げつけて見ると、
危うく当りさうにはなよが、鳥はひよいと飛
び立つて、すぐまた近くに下りて来る。決し
て遠くへは逃げて行かない。それに釣られて

中央公論　六月号　五印
（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

わたくしは、あとから／＼小石を拾って鳥をねらった。どれも当りさうにはなるが、中々当らない。当らないとなると姉の病気は癒らないことになる。従って当らない矢数が重なる毎に、当らなければ大変だといふ気持が高まってくる。わたくしは殴々與奪して、夢中になっていた石を投げ続けた。それた後って鳥は前よりも遠のいて行った。当る可能性は殴々減って行った。それに後ってわたくしは益々興奮し、泣きたいやうな気持になって来

中央公論　六八号　五印

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

た。こんな女に捕はれたことを後悔して心が暗くなつた。やがて鳥が遠くへ飛び去つた時に、やつとあきらめて向ふ岸の方へ歩き始めたが、その時は妹の病気のことが心配で、ほかれ何も考へることが出来なかつた。

しかうしてやつと東園村の入口へ来て、ふと用事を思ひ起した時に、わたくしは文箱を座けるの名をすつかり失念してゐることに気づいたのである。いくら思ひ出さうと努力して見ても、どうしても思ひ出せなかつた。小

中央公論　六月号　五印

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

さな蓮池が前にある家だということだけを覚えてゐて、蓮池を探すと、さういふ蓮池は幾つもあつて、どれがその家のであるか解らなかつた。文箱には封がしてあつて中を見ることとは出来なかつたのであるから、わたくしは仕方がなしに、しほ〳〵と文箱を持つて引き返して来たのである。

帰りに田ん川原を通つた時には、僕の用事を果すことの出来なかつた落胆が前の皮の失敗の上に加はつたのであるから、何とも言へ

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

ず暗い気持になった。わたくしは何となく妹の病気を癒やなくした責任を感じた。

家へは裏口から入ったが、美しづめ祖父の所へ使の不首尾を報告に行かなくてはならないので、裏庭を通り抜けて、さそ猛烈に怒鳴りつけられるであろうとびくびくしながら祖父の部屋の方へ近づいて行くと、その手前の薬局の窓の下で父に呼び止められた。その時父は「12/9」かのが死にかけとよそ」と言ったのであつたなやうに思ふ。わたくしは川原での

中央公論原稿用紙 六号 五〇字詰
(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

石があまりによく適中したので、すっかり御天狗のような気持になった。わたくしは祖父のところへ行って大急ぎで使ひの不首尾を報告し、すぐに妹の方へ行かうとして中腰になってゐた。祖父は場合が場合なのであまり悠々と鳴りつけもせずに、「あっさうか」と言って苦笑ひをしただけであった。

妹の寝てゐる部屋へ行くと、母がそばについてゐた。もう眼が見えなくなってゐるらしいと言ふ。わたくしは驚きに名を呼んで見た

中央公論　六月号　五印

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用